

救急医療を崩壊させないための提言

1

みんなで救急医療を守り抜きましょう

救急医療の資源は有限であり、救急隊、病院、医療スタッフの懸命な努力で支えられています。

一般市民の方々にはその事実を理解していただき、ご協力をいただかなければ、現状を支えていくのは非常に困難です。限られた資源を有効に生かすには双方が協力して現実を見つめて解決策をさぐる必要があります。

2

急病以外は時間内に受診してください

残念ながらすべての方に満足いくような充分な数の医師や看護師、病床などを備えていません。救急医療を本当に必要としている患者さんに、必要な分を準備することだけでも苦労しています。患者さんの都合で時間外診療を望まれるとその分医療資源が費やされ医療スタッフは疲弊してしまい、本当に救急医療が必要な患者さんに、必要な救急医療を提供できなくなる恐れがあります。

3

救急医療体制が限界であることを知ってください

受診先が判らないから、無料だから、という理由だけで救急車をタクシー代わりに使わないようにしましょう。救急車は病状の重い緊急の治療に必要な方の緊急搬送に使われるものです。

昼間は仕事で夜しか受診できない、休日でないと病院に行けない、救急だと待ち時間が少ないからといった理由だけで、救命救急センターや夜間急患センターを使わないようにしましょう。自分の都合だけで使われる方が増えると、救急車や救命救急センターのスタッフは仕事が増えて、救急医療の体制が崩壊してしまう恐れもあります。医療という資源は決して無限ではなく、限りある公共のものです。みんなで大切に利用する心がけが必要です。

4

医療の不確実性を理解してください

医療行為の結果は確実に予想できるものではありません。病気が同じであっても、患者さんのそれまでの経過や状態にはそれぞれ大きな違いがあります。また同じ治療や手術をしてもその結果が大きく異なる場合があります。医療スタッフが一生懸命努力しても、残念ながら不満足な結果になることはあり得ます。だからこそ、医療には相互の信頼関係が必須であり、対話を通して信頼関係を築きあげることが必要です。

5

終末期医療をどうしたいのかについて日頃から話し合っておきましょう

ふだんの元気な時から人生の最終の場面になった場合どのような最後を迎えるのか、どこまで治療を望むのか、家族を交えて話し合う機会をもつことも大切です。その結果を記録して具体的に意思決定しておくとなお確実です。入院された場合、医療スタッフはその御意思を尊重します。詳しいお話や説明を希望されれば、医療スタッフとの話し合いの機会を持ちましょう。

6

かかりつけ医と在宅医療

病院ではなく、在宅で看取られる方法をお望みの方は、かかりつけ医にぜひ相談してみてください。在宅医療も選択できるかもしれません。ただし急に具合が悪くなった場合は、病院で治療を受けることもあり得ます。診療所と病院とでは役割が異なることを理解していただかねばなりません。このことに限らず、日頃から相談しアドバイスをもらえるようなかかりつけの先生を持つことは、とても重要です。